

漢点字普及への試み

高 垣 洋 一*

Trials for the Spread of Braille Points Named “KANTENJI”

Yoichi TAKAGAKI

はじめに

小文は、漢点字と呼ばれている文字を視覚障害教育（とりわけ、盲学校の国語教育）に導入し、さらに普及させたいと願って、筆者が今日まで行ってきた実践の報告である。

小文を通して読者諸氏に漢点字の存在を紹介し、筆者の試みに対する御指導・御助言・御批評を仰ぎたい。

1 漢点字との出会い

(1) 存在を知る

筆者は、平成13年（2001）4月に鳥取県立鳥取盲学校へ国語教師として赴任した。盲学校教員免許は持っておらず、点字に関する知識もまったく無かった。

着任したその日から、懸命に点字の勉強を始めた。高等部普通科3年生の担任となり、普通科の国語の授業をするほかに、高等部保健医療科や専攻科理療科の国語も一部分受け持ったが、授業をする相手の生徒たちは大半が点字使用者であり、授業者たる筆者が点字を知らないでは済まされなかつたのである。

点字について自学自習するほかに、教員間の研究組織（領域分野別研究会）では「点字班2」に所属し、点字表記法の基礎を学んだ。

点字に対する理解が進むにつれて、日々の授業実践の中からさまざまな疑問が湧いてきた。その中の最大の疑問が“なぜ点字の世界には漢字がないのか”ということであった。

やがて、“点字の世界にも、漢字に相当するものがあるらしい。それは普通の点字のように6点で表すのではなく、8点で表し、漢点字と呼ばれているらしい”ということを知った。しかし、普通科や中学部・小学部の同僚の誰に尋ねても「そういう文字があると聞いてはいるが、自分は知らないし、児童・生徒にも教えていない」とか「盲学校のカリキュラムでは必修になっていないから、誰もよく知らないし、教えないのだ」というような答であった。

筆者は直感的に、盲学校の国語教育を深化・充実させるためには、漢点字の導入が不可欠だと思い、漢点字を誰かに習いたいとも思ったが、現実には日々の授業をこなすのが精一杯であった。担任している生徒が高普3の受験生なので、大学受験指導もせねばならなかつた。

漢点字というものが気になりつつも、実際に誰かに教わってみるというところにはまではいかなかったというのが、鳥取盲学校1年目の筆者の実態である。

(2) 独学で学ぶ

ようやく日々の国語科の授業をそれなりに大過なくこなすコツをつかみ、自分の授業のレベ

* 元鳥取県立鳥取盲学校教諭

2マス目に終点だけをつける。どうしても2マスに収まりきれない場合には3マス漢点字となり、

𠄎𠄎𠄎 (鰓) 𠄎𠄎𠄎 (堺)
𠄎𠄎𠄎 (鴉) 𠄎𠄎𠄎 (靄) 𠄎𠄎𠄎 (弩)

真ん中のマスには始点も終点もない。このように、始点・終点は、単に仮名と漢字を区別するためのサインで、漢点字の本体は従来の6点部分で構成されているのである。

「6点が8点に増えるのだから、さぞかし複雑で難解な文字なのだろう」との先入観を抱きがちだが、それは杞憂である。たしかに初学者が漢点字を最初に見た時には「何と難しそう！」という印象を持つのは否めない。しかし、それは漢点字に慣れていないからそう感じるのであって、基本的な作られ方の仕組みさえ理解すれば、たいへん覚えやすい文字である。

従来の点字（6点）が理解できる人なら、漢点字も根気よく学び続ければ必ず理解できると断言してよい。

3 漢点字の導入

3年間独学を続けるうち、筆者の“何としてもこの文字を生徒たちに教えたい”という欲求はますます強くなった。“漢点字は決して難解な文字ではなく、生徒たちに大きな学習負担を強いるものでもない。むしろ、学びやすく、覚えやすく、身につければつけるほど点字使用者の役に立ち、明るい未来を切り拓いていく力になってくれる素晴らしい文字だ”との確信が持てたからである。

また、それは決して生徒たちへの押しつけではなく、生徒たちの方でもぜひ学びたいという強い学習意欲を抱いていたのである。

そこで、平成17年（2005）4月、ついに筆者は自分が担当する国語科と道徳の授業に漢点字を導入した。対象生徒は学級担任をしていた中

学部3年生の女子3名と、高等部普通科3年生の女子1名の、計4名である。ちなみに、当時、当該学年に男子生徒はいなかった。

この4名に具体的にどのような授業をしたのかは後述する。その前に、なぜ筆者が盲学校の授業に漢点字を導入したいと熱望したのかを述べることにする。

4 漢点字の必要性

筆者が、自分の授業に漢点字を導入したいと思ったきっかけは、担当している生徒たちの国語の成績が悪いということであった。“学習態度は真面目なのに。教科書を読ませれば上手にすらすらと読めるから、分かっているはずなのに。なぜ、彼ら・彼女らはこんなに出来が悪いんだろう。決して頭が悪いとは思えない。その証拠に、日常会話ではけっこう高度な内容の話でも通じ合える。目が見えないというハンディを考慮したとしても、もっと国語が出来てもよさそうなものなのに……？”と、毎日のように悩んでいた。

やがて筆者は、“生徒たちが悪いのではない。国語の成績が伸びないのは、この生徒たちが勉強を怠けているからでも、文学的センスが無いからでも、読解力が弱いからでもない。犯人は点字（点字表記）だ！”と気づいた。

(1) 点字の欠陥

点字が視覚障害教育に果たしてきた多大の貢献や、その恩恵については筆者がここにわざわざ述べるまでもあるまい。点字を考案したフランスのルイ・ブライユ（Louis Braille 1809～1852）や、それを日本式に翻案した東京盲啞学校の教員石川倉次（いしかわくらじ 1859～1944）の業績は、もっと広く世間に知られ、賞賛されるべきだと筆者は思っている。

点字表記では、いずれも

であり、
 どの意味なのかを確定することはできないし、
 そもそも一読してただちに理解することがそう
 とう難しい文である。漢点字を用いれば、

となり、簡単に確定（正しく理解）できる。

C タカガキケニワマイゾーキングアタクサンアル。

【高垣家には埋蔵金がたくさんある。】

【高垣家にはマイ雑巾がたくさんある。】

※ マイ=自分専用の

となり、一応点字でも表記上の区別はできる。
 しかし、おそらく後者は、マス空けを間違えて
 打った文だと誤解されてしまい、「マイ雑巾」を
 思いつく人はいないであろう。なにしろ従来の
 点字にはひらがなとカタカナの区別さえ無いの
 だから。

漢点字を用いれば、何の問題もない。一読して
 正確に両方の意味が理解できる。

※ 漢点字表記では、ひらがなとカタカナ
 も区別して打つ。とに囲まれている
 部分がカタカナである。

D ウラニワニワニワニワニワニワニワトリガ

イマス。

墨字でも、カタカナ（または、ひらがな）だ
 けで書かれているとさっぱり解らないであろう。
 点字でも事情はまったく同じである。

これでは何の事やらさっぱり
 解らないので、点字表記では、少しでも意味を
 分かり易くするためにマス空けをする。つまり、
 次のように打つ。

さらに、これに読
 点をつける。

これとどうにか解
 る人もいるであろうが、実際にはこれでもまだ
 解らない人の方が多いので、次のように書くの
 が一般的である。

ところが、ここまで工夫したとしても、この
 点字表記を一読して正しい意味を読み取れる人
 は少ないだろうと言わざるを得ない。この文の
 正解は

【裏庭には二羽、庭には二羽、鶏がいます。】

である。つまり、裏庭に2羽・表の庭に2羽で、
 合計4羽の鶏がいるのである。私たちが日常接
 している日本語表記は漢字仮名交じり文である
 から、一読してたちどころに意味が分かるが、
 点字表記は表音文字（しかも、ひらがなとカタ
 カナの区別さえ無い）であるから、晴眼者の想
 像を絶するほど難解なのである。

漢点字を用いれば、何も特別な工夫は必要なく、
 晴眼者の場合の墨字表記（漢字仮名交じり
 文）と同様に、たちどころに意味が分かる。

E タイチマイウエテタチサルヤナギカナ
【田一枚植ゑて立ち去る柳かな】

有名な芭蕉の『奥の細道』に出てくる句である。川柳や俳句、短歌など、点字表記を一読して理解できる生徒はたいへん少ない。漢字（漢点字）は便利なものだと痛感させられる。

従来の点字表記では、このようにマス空けをするため、川柳や俳句の五七五のリズムが崩れてしまうという難点がある。もちろん短歌の場合も、五七五七七の独特のリズムは滅茶苦茶になってしまう。

肝腎の句の意味の理解であるが、平成13年に受け持った高普3の女生徒2名は完全にお手上げであった。

まず、 が分からない。 = 田と、すぐには結びつかないのである。両名とも田植えを体験してはいるのだが、田を〇〇枚と数えることを知らないから、この部分が難解になってしまう。さらに = 植ゑてとならず、飢えてと勘違いしていた。

“ というのはよく分かりませんが、たぶん貧乏で着る物が1枚しか無いんでしょう。それで、とっても飢えていて、もうこの土地では暮らせないからどこかもっと食べられる場所に立ち去ろうという悲しい句です” というような理解だったと記憶している。

※ 残念ながら当時の授業記録を残していないので、正確には覚えていない。

平成17年に教えた高普3の女生徒は漢点字を導入していたので

という表記の形で読ませた。枚・柳を表す漢点字は未習であった。従って = 田であり、 = 「植えるであって、飢えるではない」ことが一読で分かるので、何の苦労

もなかった。漢点字の有り難さは、こういう俳句の授業がスムーズに進むところにもある。

F キミガユクミチノナガテヲクリタタネヤキ
ホロボサムアメノヒモガモ

これは『万葉集』所収の第3724番の和歌（狭野茅上娘子作）である。

の形で与えられた平成13年の高普3生たちは、まず五七五七七のリズムで読むことに苦労していた。

歌の意味もさっぱり分からないようであった。“長い手で栗を獲るのですか？”“未知の名が、じつは っていう名前だったってこと？”“栗を焼いて食べるのかなあ”“でも焼き滅ぼすって言ってるよ。変じゃない？”“雨の日にわざわざ栗を獲りに行くかしら”“雨の日じゃなくて、飴の紐なんじゃない？”“ヒモガモっていう鴨の種類かな。でも、そんなの聞いたことがないし。昔にはそういう鴨がいたのかなあ”などと、大変困っていたのを記憶している。

平成17年の高普3生も、この和歌にはずいぶん苦労したが、それでも漢点字のお蔭で授業ははるかに楽であった。

という表記の形で読ませたので、短歌独特の五七五七七リズムで、苦もなく読めていた。

※ 漢点字表記では、墨字の表記に出来るだけ近づけて書く原則なので、マス空けはしないのであるが、この授業の場合は五七五七七のリズムを教えたくてマス空けの表記とした。

歌の意味の理解も、平成13年の時のような誤

解は少なかった。ㇿㇿ=道であるから、「未知の名が……？」などと誤解するはずがない。ㇿㇿㇿㇿと打ってあるので、「雨の日」や「鮎の紐」でないことはたちどころに分かる。

※ もっとも、漢点字は表音文字でないの
で、この時の女生徒はㇿㇿㇿㇿをアメ
ノヒとは読めず、テンノヒと読み間違
えてしまった。

以上のA～Fの例だけでも、筆者が何としても盲学校の国語の授業に漢点字を取り入れたいと熱望した理由がお分かりいただけよう。

さらに、従来の点字表記では、幾通りもの解釈ができて、いったいどの意味か確定できず困ってしまう例を挙げてみる。

G ワタシワセーカギョーライトナンデイル。
【和多氏は生花業を営んでいる。】 = 花屋
【綿氏は製菓業を営んでいる。】 = 菓子屋
【輪田氏は青果業を営んでいる。】 = 果物屋
【弘原海氏は製靴業を営んでいる。】 = 靴屋
【WATA 氏は生家業を営んでいる。】 = 生まれた家の商売を継いでいる
【私は正稼業を営んでいる。】 = やくざな“浮き草稼業”ではなく、まっとうに働いて暮らしを立てている。

これらが、取り敢えず考えられる解釈である。つまり、この文の「ワタシ」に相当する部分は次に示すように8通りの可能性があり、「セーカギョー」の部分には6通りの可能性がある。

ワタシ……和多氏・綿氏・輪田氏・弘原海氏
・ワタ氏・WATA 氏・わたし・私
セーカギョー……生花業・製菓業・青果業・
製靴業・生家業・正稼業

したがって、単純計算すると $8 \times 6 = 48$

解釈の可能性は少なくとも48通りもあるということになる。(少なくとも書いたのは、和田と

いう姓でワタと発音するワタシがあるかもしれない。輪多と書いてワタと発音するワタシがあるかもしれない。日本人の姓はじつに多彩だから、筆者が思いつく以外に、まだまだたくさんのワタシがありそうだ)

H ワタシワコーカイヲコーカイシタ。

【和多氏は紅海を航海した。】

【綿氏は黄海を航海した。】

【輪田氏は公海を航海した。】

【弘原海氏は航海を後悔した。】

【ワタ氏は航海を公開した。】

【WATA 氏は公開を後悔した。】

【わたしは更改を公開した。】

【私は更改を後悔した。】

【私は“コーカイ（の意味）”をこう（このように）解した（解釈した）。】

これらが、取り敢えず考えられる解釈の例である。つまり、この文の「ワタシ」に相当する部分は前述のように8通りの可能性があり、「コーカイヲコーカイシタ」の部分には9通りの可能性がある。

コーカイヲコーカイシタ……紅海を航海した・黄海を航海した・公海を航海した・航海を後悔した・航海を公開した・公開を後悔した・更改を公開した・更改を後悔した・“コーカイ”をこう解した

したがって、単純計算すると $8 \times 9 = 72$

解釈の可能性は少なくとも72通りもあるということになる。(少なくとも書いたのは、多少強引にこじつければ「私（＝連合艦隊司令長官東郷平八郎）は黄海（海戦）を後悔した」なども考えられるからである)

ところで、私たち晴眼者は日本語表記を漢字仮名交じりで行っている。実際には漢字、ひら

記とする。

よな ㇿㇿの どまんなかに
げん ㇿㇿりよく はつでんしょを つくる。

よな ㇿㇿのどまんなかに げん ㇿㇿ
はつでんしょを つくる。

よな ㇿㇿのどまんなかに げん ㇿㇿ
ㇿㇿでんしょを つくる ㇿㇿかくが ある。

よな ㇿㇿのどまん ㇿㇿにげん ㇿㇿㇿㇿでん
しょをつくる ㇿㇿかくは ㇿㇿㇿㇿされた。

また、改行については、連文節の途中で次の
行にまたがる可能性がある場合には、行末まで
書かないで改行するようにした。従来の点字表
記では、文節の途中で次の行にまたがる時には
行末まで書かないで改行するからである。その
ような例を示す。

ㇿㇿとつまは ㇿㇿしゅう ㇿㇿの ㇿㇿかを取り、
ㇿㇿㇿㇿㇿㇿじゅんに しんこんりょ ㇿㇿに
ㇿㇿㇿㇿㇿㇿしました。 しょかの ㇿㇿかいどうは
ㇿㇿㇿㇿㇿㇿの ㇿㇿがただよっていました。

しかし ㇿㇿは、 はなよりも ひつじの ㇿㇿが
ㇿㇿべたかったのです。 ㇿㇿに ㇿㇿいて
ㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿのせん ㇿㇿへ
ㇿㇿきました。

このような改行の仕方でも学習を進め、次第に
連文節の途中であっても行末まで書くという、
漢点字本来の表記の仕方へと移行していった。
つまり、次のような書き方である。

ㇿㇿとつまは ㇿㇿしゅう ㇿㇿの ㇿㇿかを取り、
ㇿㇿㇿㇿㇿㇿじゅんにしんこんりょ ㇿㇿに ㇿㇿㇿㇿ
ㇿㇿㇿㇿㇿㇿしました。 しょかの ㇿㇿかいどうは ㇿㇿㇿㇿ
ㇿㇿㇿㇿの ㇿㇿがただよっていました。 しか
し ㇿㇿは、 はなよりもひつじの ㇿㇿが ㇿㇿべたか
ったのです。 ㇿㇿに ㇿㇿいて ㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿ
ㇿㇿのせん ㇿㇿに ㇿㇿきました。

授業が3～4回終わる毎に、約20問程度の練

習問題を解いた。ただし、これはテストではな
く、成績評価にはまったく入れなかった。した
がって、生徒たちも気楽に（むしろ楽しんで）
解いていた。

生徒3名は、毎時間「吠えるゲーム」を楽し
んだり、例文中の新出漢点字が何という字なの
かを推理することに興味を示し、漢点字の学習
を負担に感じているような様子は見られなかつ
た。また、この基本的な流れがマンネリ化して
授業がだれてしまうということも無かった。

何という漢点字が分からない例文が出てくる
こともあったが、それでもがっかりして落ち込
むことはなく、お互いに「ドンマイ、ドンマイ」
とか「焦らず、急がず」と声を掛け合っていた。

筆者も、「忘れたら、また覚えりゃいいんだよ。
何回も繰り返せばいいんだ。忘れたって命を取
られる訳じゃなし、退学させられる訳じゃなし。
僕だって、しょっちゅう忘れてるよ」と言っ
ていたし、それに対して生徒が、「私たちが分から
なくたって、先生の給料、下がらないもんね」
などと茶化したりもした。

3名の生徒からは、

「今日は〇〇という漢点字を覚えた」

「家に帰ってから、お母さんに△△という漢点字
を教えてあげました」

「先生、今、通算で何字勉強したの？」

等の発言がみられ、給食時にも、

「食という字は ㇿㇿ（セ）だでなあ」

「牛肉の ㇿㇿは分かるんだけど、牛はどう書くん
ですか」

「私、ラサガリ大好き！（私は肉が大好き）」

「あんまり他人^{ひと}のことを計^{はか}る・計^{はか}るって言っ
たらいけん^アで（他人に向かってエロ・エロって
言っちゃ駄目よ）」

等の会話が弾むこともあった。

漢点字の授業は、3名にとって決して学習負

か、速度はやや遅くとも、一回読んだだけで正しく理解できる漢点字交じり文を読める力をつけてやるのがよいかと問われれば、筆者は躊躇せず後者を良しとするものである。

これは、筆者の独断ではなく、生徒たちも同意見であった。

中3の3名は異口同音に、「こんなに便利で簡単なことを、どうして今まで誰も教えてくれなかったの」と言ってくれたし、高普3の生徒は、「先生に漢点字を毎週習い始めてから、墨字文章を作るときに、漢字変換ミスが減ったんですよ。〇〇先生に褒められました」「卒業したら、もう、先生に漢点字を習えなくなるのが寂しい」とまで言ってくれた。教師冥利に尽きるとはこの事であろう。

6 約1年間の授業を終える頃に

このような確かな手応えがあり、筆者は漢点字の導入に自信を深めた。そして“来年度は、鳥取盲学校に漢点字を学ぼう・教えようという人々の輪が広がってほしい”と切に願った。

そのような輪を作り、広げていくためには何と言っても初学者用の分かり易い入門書が必要である。そこで『漢点字入門』の鳥取盲学校版を作ることを思い立ち、実行に移した。

漢点字考案者の故川上泰一氏が、初学者のために『漢点字入門』を著されてから、既に長い月日が経っている。この書の点字版は数度の改訂が行われたらしいが、墨字版は昭和62年(1987)10月に初版第1刷が発行されて以来、一度も改訂されていないようであった。(筆者が全盲の専攻科の先輩教師から紹介されたのは平成7年(1995)6月発行の第2刷だが、まだ初版のままで、仔細に読むと誤植もあり、練習問題の中には現代にそぐわない内容のものもある)

そこで、筆者は川上泰一著『漢点字入門』を

底本に、筆者自身の自学自習における苦労・失敗の体験と反省を加味して鳥取盲学校晴眼者用私案を作成した。この本を『優しい易しい漢点字』と名付け、校長以下、寄宿舎指導員や事務職員にいたる全教職員に配布した。また県教育委員会特別支援教育室(当時)や県教育センターなどの関係諸機関にも送付した。点字印刷にすると、一瞥しただけで「これでは読めない!」という人がほとんどだが、墨字印刷の本なら目を通してもらえるだろうと期待したのである。また、晴眼者だけでなく弱視の教員にも読んでほしかったし、将来漢点字学習の輪が広がれば弱視の生徒の学習用にも使えると思ったので、原稿の書式は鳥盲標準(A4版・13ポイントゴシック体・1行に29~30字程度・1頁に23~25行程度)とした。

この本を配布・発送した平成18年(2006)2月8日当時、筆者の頭の中には、次に作る予定の『漢点字解説(鳥取盲学校晴眼者用私案)』の構想が渦巻いていた。

学年末はあまりにも多忙なので、新学期から『漢点字解説』の原稿作りに取りかかろうと考えていたが、予期せぬ人事異動のために鳥取盲学校を離れることとなってしまった。

7 盲学校を離れて

平成18年(2006)4月、“やり残した宿題は山ほどある”という思いを抱えながら現任校へ異動した。

盲学校を離れてしまったが、筆者は常に漢点字の普及のことが気になっていた。もう直接盲学校の生徒たちに漢点字を教えることはできないが、何らかの形で漢点字を普及させる活動に邁進したいと願った。謂わば、漢点字普及のために外堀を埋める試みを模索したといえよう。

(1) 『みんなで楽しく漢点字』の作成

盲学校の生徒たちに直接漢点字を教えることができないので、筆者の後を継いでくれる教師が出てきてほしいと願った。後継者たちのために何かをしたいと考えた。

そこで、筆者が中3や高普3の授業で使い、授業後に改良を加えた例文や練習問題を整理して、本の形にまとめることを思いついた。“そのような本があれば、私の後を継いで漢点字を基礎から教え始めようとする後輩教師にとっても、^{いち}1から学び始めようとする児童・生徒にとっても、どんなに便利なことだろう”という思いが働き上げてきた。

改めて『優しい易しい漢点字』を読んでもみると、あまりにも拙速に作りすぎたという悔いが生まれた。日々の業務を遣り繰りしながら、寸暇を見つけて『優しい易しい漢点字』の原稿を作っていた頃は、“鳥取盲学校に漢点字を学ぼう・教えようという人々の輪を広げたい”の一心で、明らかに急ぎすぎている。少し冷静な目で読み直すと、誤植も多く、載せている例文や四字熟語等ももっと別のものを採用すればよかったと悔やまれた。

そこで、改訂作業に取りかかった。改訂版の原稿は平成18年(2006)8月2日に完成し、これを『みんなで楽しく漢点字(漢点字入門・墨字使用者用私案)』と名付けた。“みんな”とは、鳥取盲学校に限らず、漢点字に興味・関心を抱いてくださる多くの一般読者を想定している。教師・生徒の別を問わない。晴眼者用とせず墨字使用者用としたのは、弱視の方にも読んでいただきたいとの願いを込めてのことである。

この本を、鳥取盲学校はもちろん、『優しい易しい漢点字』を送付した関係機関や、公立図書館、恩師、友人・知人に謹呈した。この本を読んでいただくことによって、鳥取盲学校には筆

者の後を継いでくれる後輩が出てくることを願い、広く一般社会には漢点字というものの存在と、その有用性を知っていただきたいと願ったのである。

(2) 四部作の完成

『みんなで楽しく漢点字』に続けて、漢点字学習用例文集や漢点字学習用読み物を作った。

特に漢点字学習用読み物は、『みんなで楽しく漢点字』を送付した方々(視覚障害教育や国語教育とは縁遠い、一般の方が多かった)の要望に応える形で、急遽予定外の作成となった。

例文集について

鳥取盲学校で漢点字学習を始めた当初は、試行錯誤の連続であった。どうすれば楽しく・無理なく・着実に漢点字を身につけることができるだろうか……?いろいろ試みた末に、漢点字それ自体を単独(1字)で示すのではなく、熟語の形で提示するのでもなく、『漢点字を用いた短文をたくさん用意して、皆で一緒に読む』という方法が最適だということが次第に分かってきた(それらの短文中に漢点字を用いた熟語を多く取り入れるのは当然である)。

この方法だと、訓読みの場合の送り仮名を自然に身につけることができるし、何より、日常接する文章の中のどういう言葉をどんな漢点字で書き表すのか、あるいはどんな言葉の場合には漢点字を用いないのかが、次第に体験的に分かってくる。

ところで、筆者は“ある漢字を教える際に、生徒にどのような用例を示すか”に教師の力量と見識が問われると常々思っている。例えば、 (土) という漢点字を教えるのに、熟語として土人・土方・土木・土星のどれを示すか? 筆者は、たとえ (人) や (方) が第一基本文字であってそれを既に習得していたとしても、

にそれらを組み合わせた や を生徒たちに提示したくはなかった。

四字熟語を用いる際にも、 瞭然（一目瞭然）よりも岡 (岡目八目) を示して、同じ という漢点字を初めのはメと読み、2番目はモクと読む【漢点字は一つの字に幾通りもの読み方がある】ということを教えようとした。 色（十人十色）の などその例である。このような配慮をした例文を以下に少し挙げておく。

- ・孔 や孟 は男性で、蘇我馬 や小野妹 も男性だ。
- ・女の はこちらの からお入りください。男の はあちらの からお入りください。
- ・校庭に雑 が生えてきたので、取りをした。
- ・ があなたの 談 になりましょう。

また、 (手) を用いた例文の候補として

- ① は 芸が趣味です。
- ② は 芸が得意です。
- ③ は 芸部に入っています。

の三つを思いついたとすると、①を採用するようにした。①では、同じシュという発音でもシュゲイのシュは という漢点字を用いるのに、シュミのシュは を用いない（ちなみに、趣味のシュは である）ことが感じ取れる。例えば、「帽 をかぶる」と「遣隋使小野妹 」などもこれに似た配慮である。“ボウシのシは を用いるのに、ケンズイシのシは ではない。小野妹 はオノノイモシではなくオノノイモコと読む”ということ、なるべく教師の説明抜きに、生徒に気づかせたかった。

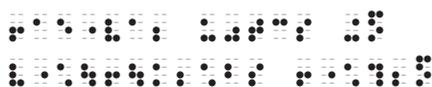
(田) という漢点字を教える例文として、

- ・アラビア半島の油
- ・東シナ海のガス

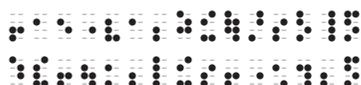
などを示し、カタカナ符も同時に教えて、どんな言葉をカタカナで書くのかを自然に理解でき

るように配慮したつもりである。

生徒たちには次のような形で与えた。



学習が進むにつれて、下のようになくなっていく。



上記のようなさまざまな配慮をし、生徒の反応を基に、授業後にさらに改良を加えた。幸いそれらの例文をデータとして残していたので、現任校の本務を終えてからデータを見直し、精選して例文集を作り、『慌てず急がず漢点字（漢点字例文集・墨字使用者用私案）』と名付けた。

読み物について

『みんなで楽しく漢点字』を送付した方々からの要望を参考に、漢点字学習用読み物を作った。

具体的には、筆者の愛読している作家の一人である故松下竜一氏の短編集『潮風の町』を、第一基本文字から始めて傍側合成までの漢点字を駆使して漢点字訳・墨点字化したものである。以下に目次を列挙し、どの短編をどの漢点字を用いて訳したのかを示す。

- ・はじめに
- ・潮風の町（第一基本文字のみ）
- ・ちえかび萌えよ（単純合成）
- ・夜、蜂鳥など（二字選択）
- ・紅雀を買いに（対象文字）
- ・ジョーベット（対象合成①②）
- ・鉛筆人形（対象合成③④）
- ・咳取り老人（第二基本文字）
- ・人魚通信（第二合成①②）
- ・虹の通信（第二合成③④）
- ・絵本切る日々（第二合成⑤）
- ・迷い子（第二合成⑥⑦⑧）
- ・風船昇れ（第二合成⑨⑩⑪）

- ・ 笹舟に乗せて (第二合成⑫⑬)
- ・ 紫苑の部屋 (近似文字)
- ・ 公園にて (傍側合成とその合成文字①)
- ・ おわりに

例文集 2 について

『慌てず急がず漢点字』に載せなかった例文のデータを見直し、多少改良を加えて復習用例文集を作った。この本は5章からなっている。

第1章は総復習初級編で、第一基本文字・単純合成・二字選択・数符・比較符・対象合成の復習ができる。

第2章は総復習中級編で、復習内容は第一基本文字から対象合成までであるが、章の始めに次のように書いている。

「これから す はすべて とひらがなでかかれています。 に が つもないので、 がいむずかしいと いますが、あなたのじつ を するには い ばかりです。」

第3章は総復習上級編で、中級編よりさらにレベル・アップし、すべての文章が墨点字の状態印刷されている。すなわち、次のような状態である。

ちなみに、章の始めに次のように書いている。

「 を用いた 章では、基 的に けはしないのですが、ここでは、初 のためにある程度読みやすくするため、適宜 けをして表記しています」

第4章は総復習上級編を解くためのヒントを載せている。

第5章は、「ご質問に答えて」のコーナーで、これまでに筆者に寄せられた漢点字に関する質

問やご意見・感想などの中で特に多かったものについてお答えしている。

この本を『ゆっくりのんびり漢点字 (漢点字復習用例文集・墨字使用者用私案)』と名付け、これまでに送付した方々が紹介して下さった新たな方も含めて、多くの人々や関係機関・公立図書館に謹呈した。

※ 『みんなで楽しく漢点字』

平成18年 (2006) 8月2日完成

(ただし、発送は平成19年5月24日)

『慌てず急がず漢点字』

平成19年 (2007) 6月30日完成

『潮風の町』

平成19年 (2007) 12月29日完成

『ゆっくりのんびり漢点字』

平成20年 (2008) 2月1日完成

筆者が「盲学校でやり残した事の、せめて千分の一でもやっておきたい」と願い、漢点字普及のために外堀を埋める試みとして取りかかった【漢点字入門編4部作】が完成した。

(3) その後

漢点字入門編4部作を使っただけならば、それから先は独学で大きな失敗も無駄も誤解もなく、あの名著『川上漢点字』を使いこなせるだろうと思った。

そこで、外堀を埋める試みとして漢点字学習用読み物をさらに作り続けることにした。現任校の本務との両立はたいへん苦しかったが、漢点字普及のために出来ることを精一杯やりたいと思い、毎日寸暇を惜しんで少しずつ原稿を書きためていった。

『豆腐屋の四季』 (松下竜一著)

平成20年 (2008) 11月4日完成

傍側合成②～一連性⑮までを使って漢点字訳・墨点字化した

- 『私本・源氏物語1』(田辺聖子著)
平成20年(2008)11月4日完成
傍側合成⑥～一連性⑫までを使った
- 『私本・源氏物語2』(田辺聖子著)
平成20年(2008)11月4日完成
一連性⑬～漢文基礎文字⑨までを使った
- 『この世をば1』(永井路子著)
平成20年(2008)12月29日完成
総集編①～③までを使った
- 『この世をば2』(永井路子著)
平成21年(2009)6月14日完成
総集編③～⑤を使った
- 『この世をば3』(永井路子著)
平成21年(2009)6月14日完成
総集編⑤～⑦を使った
- 『この世をば4』(永井路子著)
平成21年(2009)8月2日完成
総集編⑦～⑨を使った
※紙数にゆとりがあったので、総集編⑩
までを使った練習問題を作り、その模
範解答も載せた。付録として練習問題
上級編に出る漢字一覧表も付けた。
- 『この世をば5』(永井路子著)
平成21年(2009)9月20日完成
総集編⑨～⑪を使った
- 『この世をば6』(永井路子著)
平成21年(2009)11月3日完成
総集編⑪～⑮を使った
(ただし、平成22年1月現在まだ発送し
ていない)
- 『この世をば7』(永井路子著)
平成22年(2010)1月現在、漢点字訳を
終えて、墨点字化が進行中
2月中旬には完成予定
総集編⑰～⑱のすべての漢点字を使う予
定である

8 授業実践を振り返って

鳥取盲学校で、中3の生徒3名・高普3の生徒1名と毎日楽しく漢点字を学んでいた頃から既に4年近い月日が過ぎ去ろうとしている。今こそ、あの1年間の授業実践を冷静に、客観的に振り返ることができる時だと思う。

(1) 教えてみた実感……大きな負担か？

漢点字の導入は、学びたいという意欲のある生徒には決して大きな学習負担ではない。

当時の同僚からは“普通の点字を教えるのさえ大変なのに、ましてや漢点字を教えるなんて無理だ。それでなくても、教えるべき内容はたくさんある。とても漢点字にまで手が回らない”とか、“6点が8点に増えるのだから、さぞかし複雑で難解な文字だろう。そんなものが到底覚えられないはずがない”とか“盲学校のカリキュラムで必修ではないのだから、教えなくてもよい。盲学校教育は現状でも十分立派に成り立っているのではないか。どこに不満があるのだ”等の意見を聞かされたが、それは筆者に言わせれば誤解・偏見であり、やってみてもいないのに初めから諦めてかかっている怠慢である。

漢点字は、決して複雑・難解ではない。毎日必死に勉強しても、1年がかりでせいぜい50字くらいしか覚えられないといった文字ではない。筆者自身が盲学校教師としての膨大な本務と両立させて独学し、約3年で常用漢字に相当する1945字の漢点字を習得できたという事実が何よりの証拠である。満51歳を過ぎ、新しいことを覚えるのがますます苦手になり、それまでに身につけていたはずの事さえ急速に忘れるようになっていた当時の筆者にして、晴眼者が義務教育9年間をかけてどうにか習得する分量の常用漢字に相当する漢点字を、約3年で覚えたので

ある。これ以上の“生きた証拠”は無いと思う。

筆者は、中3の生徒たちに「焦らず・急がず・着実に」と常に言い続けた。厳しく叱り、大量の宿題を課し、頻繁にテストをしてぎゅうぎゅうに詰め込むといった方法ではなかった。それでも、3月初め頃には3名とも約230字を身につけていた。230字といえば、教育漢字の学年別配当表で小学3年生が習う漢字として示されている字数(200字)よりも多い。教育漢字は現在1006字(1年生80、2年生160、3年生200、4年生200、5年生185、6年生181)であるから、1年間に慌てず急がずゆっくりのんびり230字習得するとして、漢点字なら6年もかからず、4年4カ月あまりで修了する計算になる。

“6点から8点に増えるのだから、触読がそうとう難しいはずだ”という意見もあった。これについては、筆者も不安であったし、“もしも、この生徒たちが始点(0の点)や終点(7の点)を感知できなかつたらどうしよう。せっかく漢点字を学びたいという意欲を持っているのに、その夢を打ち砕いてしまう”と恐れたが、試してみるとあっけないほど簡単に感知できた。漢点字の触読は、普通の点字(6点)が触読できる程度の触覚がある人なら、特別な訓練を積まなくても十分可能なのである。

また、生徒たちは1年間毎日朝から晩まで漢点字だけを学んでいたのではない。当然、国語の時間にも漢点字以外の多くの内容を学び、他教科の内容も一生懸命学び、中学部の全課程を修了して卒業した。他教科の教員から「あなたのクラスの3名は漢点字ばかりに熱心で、私の教科の勉強が遅れて困る」というような苦情は出なかった。

漢点字を導入したがために学習負担が大きすぎて受験勉強が出来ず、高等部入試に失敗したということもなかった。全員めでたく入試に合

格し、高等部へ進学できたのである。この事実も、何よりの“生きた証拠”であろう。

(2) その他の感想

当時を振り返り、感想を列挙してみる。

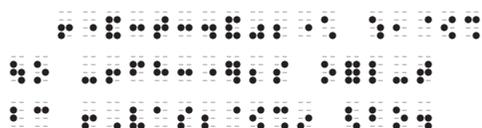
- ・ 漢点字を身につけることによって、正確に意味を理解している語彙が増え、紛らわしい同音異義語がきちんと区別でき、読解力が増す。したがって、少しずつ確かな国語力が育っていく。
- ・ 全盲の児童・生徒がパソコンで墨字文書を作る際の漢字変換ミスが減るので、それを読む晴眼者にとっても有難いことだ。
- ・ 漢点字は、確かな国語力にとどまらず、他教科の学習にも威力を発揮するはずだ。国語科以外の教師で「この教科書が仮名点字ばかりでなく、漢字やカタカナも交えた文章で書かれていたら、生徒たちにとってもどんなにか理解しやすいだろうに」と思っている方はいないのだろうか？
- ・ 「晴眼者は漢字仮名交じりの教科書を使っているのに、なぜ点字使用の生徒たちは仮名文字ばかりの教科書を使わされているのだろうか？ 疑問を持たれた方はいないのだろうか？ 漢字に相当する点字が無いというのなら話は別だが、漢点字という立派な文字があるのに！なぜ、これを教えないのだろうか？
- ・ 業務用として県から貸与されているパソコンの中に EibrK がインストールできるようにしてほしい。EibrK を使えば、漢点字訳がずいぶん簡単に行えるので、このソフトを使いこなせる教員が本校(鳥取盲学校)に増えていくことが望ましい。
- ・ 漢点字を教えたくても教科書(手引き)が無いと言われるが、無いなら作ればよいで

はないか。そんな暇はないとか、そんな難しそうで面倒なことは私は御免だでは、本校の教師は務まらないのではないかと誰かが作ってくれるのを待つのではなく、本校の教師集団の知恵と力を結集して、鳥取盲学校版漢点字学習の手引きを作ろうではないか。「そんなことは文科省がやってくれ」と言いたいのかもしれないが、盲学校のカリキュラムに漢点字を必修として位置づけていないのだから、いつまで待っていても文科省はやってくれないぞ。なぜ「誰もやらないなら私がやる！」という人が出てこないのだろう。

- ・ 漢点字表記はマス空けをしないので、慣れていない生徒には初めのうちは読み辛い。しかし、すぐに慣れる。むしろ、あの難しくてやっかいなマス空けから解放されるのだから、漢点字表記の方が楽だ。
- ・ 今すぐ全校体勢で漢点字を導入するのは困難だというのであれば、せめてカタカナ符だけでも全員に教えようではないか。これだけでも、現行の点字表記が多少分かりやすくなるはずだ。(下記参照)

ベートーヴンが さっきよく した
「エリーゼの ために」と いう
ぴあのきよくを きいた。

ベートーヴンが さっきよく した
「エリーゼの ために」と いう
ピアノきよくを きいた。



(3) 反省

反省すべき事項は多々あるが、特に一つ挙げると、「読み」の指導に偏り、「書き」の指導が

疎かになってしまった。

決して「書き」の指導を忘れていたわけではない。ただ、「書き」の指導がほとんどできなかったのには物理的な条件が大きく影響している。すなわち、書かせようにも筆記用具がなかったのである。点字を書くには特殊な筆記用具と専用の紙が必要である。点字用紙は当時の鳥取盲学校にたくさんあり、購買でも安価で販売されていたが、漢点字専用の筆記用具は無かった。筆者も8点の点字盤や8点の懐中定規は持っていなかった(8点の点字盤や懐中定規があれば、当然従来の点字=6点も書ける)。専攻科の教師の中で既に漢点字をマスターしていたごく少数の方が、8点の筆記用具をお持ちであったが、高価な物らしく、筆者が私費で生徒分も含めて購入するのは辛かった。

当時の鳥取盲学校には、点字使用の児童・生徒一人一人にパーキンス・ブレイラーが貸与されていた。この点字タイプライターはさまざまな点でひじょうに優れた性能を持っているが、残念ながら漢点字(8点)は打てない。漢点字が打てるテラタイプは鳥取盲学校には無く、「ぜひ1台購入を」とお願いして、買ってはもらえたのだが、届いたのは2学期半ばを過ぎた頃だったと記憶する。

パソコンを利用し、墨字データをテキスト化して、それをEibrKにかけて漢点字データ化するという事はできる。そのデータを点字プリンターで漢点字として打ち出す事もできる。ただ、それでは生徒たちが自分で漢点字を書いたことにはならない。

あたかも、私たち晴眼者が自分で手書きしなくてもワープロを使って変換キイを叩けば機械が勝手に漢字に変換して液晶画面に映し出してくれるようなもので、それでは漢字を書いたことにはならないし、覚えられない。晴眼者は幼

い頃から自分で手に鉛筆を握り、指と紙を汚しながら何度も何度も書いて漢字の字形を覚えるのである。

漢点字も同様で、点字盤や懐中定規を用い、点筆を握って書くか、テラタイプを使って打つのでなければ、字形（点の配列）を覚えるために書いてみた事にはならない。

このように物理的制約があり、「書き」の指導はほとんど出来なかったというのが漢点字を導入した1年目の実態である。“次年度は漢点字用の筆記用具を揃えて、「書き」の指導もしよう”と考えていたが、先述の通り、人事異動でそれが果たせなくなってしまった。大きな心残りの一つである。

9 今後の計画

何といっても、後継者を育てたい。ただ、現在筆者は盲学校に在職していないので、直接後輩教員を指導することはできない。

したがって、当面は外堀を埋める仕事をし続ける。誰かが何かをやらない限り、現状は変わらない。誰かがやってくれるのを待つのではなく、筆者は、自分に出来ることを精一杯やっていくだけである。

現在進行中の『この世をば』全巻の漢点字訳・墨点字化は間もなく完成する。次は、筆者の郷土鳥取県鳥取市出身の俳人尾崎放哉の最晩年を描いた吉村昭著『海も暮れきる』の漢点字訳に取りかかるつもりである。

現在の筆者の試みを、「君のやっている事は『労多くして功少なし』だね」と評した人があるが、「それで大いに結構！」と応じよう。「労多くして」は覚悟の上である。全国的に調べたわけではないが、少なくとも筆者の身近にこのような試みをしている人はいない。つまり、身近な人の誰もやっていない初めての事をするのだ

から、労は多くて当然。「功少なし」とは言われたが、「功無し」とは言われなかった。「功（あるいは効か？）無し」でない限り、根気よく続けていけば、極微量の功が積もり積もって、いつかはそれなりの効果を発揮するであろう。そう信じて頑張り続けるだけである。

誰かがやらなければ何も変わらない。

ただ、本音のところは「外堀を埋める仕事の意義は認めるが、もう一度盲学校に戻って、生徒たちに直接漢点字を教えたい。後継者を育てるためにも、後輩教師と一緒に漢点字を学びたい。外堀を埋める仕事はそろそろ誰かにやってもらって、私自身は本丸への総攻撃をかけたい」という思いを捨てきれない。

10 おわりに

ルイ・ブライユが19世紀（1825）に考案した点字は、視覚障害者にとって大きな福音であり、点字による教育は長きにわたって多大の成果をあげてきた。今後も、大きな成果をあげ続けるであろう。もしもこの世に点字が無かったなら、日本と言わず世界中の視覚障害教育は決して今日のようなレベルには達していない。故に、筆者は、点字の偉大な恩恵を決して否定するものでも過小評価するものでもない。

それでも、筆者は声を大にして次のように言いたいのである。

日本の盲学校における教育は、6点の仮名点字だけでは不十分だ。点字を考案したルイ・ブライユは、遠い異国の複雑極まる文字表記のことなど考慮しなかった。おそらく、表意文字の存在も知らなかったであろう。ルイ・ブライユの母国フランス、イギリスやアメリカ、ドイツ、ロシア等々、表音文字だけで生活できる国の教育なら点字（表音文字の一種）で十分だが、日本は表音文字の国ではない。日本の晴眼者は、

表音文字（ひらがな・カタカナの2種類）に加えて、表意文字である膨大な数の漢字を用いている。だからこそ、漢字が義務教育で必修になっている。さらに、漢字に加えてアラビア数字、ローマ数字、英字等も日常的に使いこなしている。このような国において、点字（表音文字としての仮名文字）だけに頼っている教育は、まるで“テレビを、わざわざ目をつぶって音声だけ利用している”ようなものだ。これではせっかくのテレビの持つ機能が有効に活かされているとはいえない。

漢点字という文字が既にあるのに、それを用いない教育（せっかくのテレビ【そのテレビは、指先で触れることによって、簡単に見ることができるのに！】を、わざわざ目をつぶって音声だけ聞いているような教育）は、明らかに不十分だ。

点字使用者は、漢点字を習ってさえいればいとも簡単に理解でき・区別できる文を相手に、漢点字を知らないがために理解できず、ああだろうか・こうだろうかと悩まなければならない。漢点字を学習すれば、彼らの読解力・表現力は飛躍的に伸びるのである。盲学校の児童・生徒（全盲および弱視の点字使用者）は国語的センスがないのではなく、読解力が弱いのもない。低学力ではない。晴眼者にとっての漢字に代わるべき漢点字を習っていないために、本来持っている素質を十分に開発・発揮することができないだけなのだ。

「点字の世界には漢字がなくて不便だから、何とかして今から作ろうじゃないか」ではないのだ。もう、とっくの昔に（今から40年も昔の昭和45年に！）漢点字は誕生しているのだ。その文字は決して複雑・難解ではなく、たいへん理に合った作られ方をしており、学びやすく、覚えやすく、身につければつけるほど役に立つ、

視覚障害者の未来を豊かにしてくれる文字だ。決して大きな学習負担にはならない。

それなのに、なぜ、盲学校では漢点字を教えないのか？晴眼者には漢字を必修にして、その便利さを十分に享受させている一方で、点字使用者はひらがなとカタカナの区別さえつかない不便な仮名文字だけの世界に閉じ込めておかないで！この、明らかなダブル・スタンダードを放置しておいてよいのか？

筆者が、漢点字の存在を知り、それを普及させるために幾つかの試みを始めてから約9年になる。ただ、その9年のうち、実際に点字使用者に漢点字を教えたのはわずか1年である。

わずか1年間の、わずか4名を対象にした実践ではあったが、筆者は漢点字を身につけることは国語力向上に直結するとの確信を抱いた。国語力が伸びれば、当然他教科の勉強にも効果を及ぼすはずであり、漢点字の導入は長い目で見れば、児童・生徒の学力向上に大きく寄与するといえるであろう。ただ、そう予言するにはあまりにも実践期間が短かすぎ、対象生徒が少なすぎるといった批判は、甘んじて受けねばなるまい。

もしも、現任校に異動することなくそのまま盲学校に勤めていれば、筆者は今も漢点字を教え続けているであろう。そして、上記の予言を授業を通して実証してみせるであろう。

文部科学省は、平成21年6月に『特別支援学校学習指導要領解説総則等編』を発行した。その第3編第2部第2章に、点字等の読み書きの指導について次のような記述がなされている。

点字等の読み書きの指導（第2章第1節第1款の1 2）

(2) 児童の視覚障害の状態等に応じて、点字

又は普通の文字の読み書きを系統的に指導し、習熟させること。なお、点字を常用して学習する児童に対しても、漢字・漢語の理解を促すため、児童の発達の段階等に応じて適切な指導が行われるようにすること。

(中略)

点字を常用して学習する児童生徒に対する漢字・漢語の指導は、漢字の字義と結び付いた言葉が多い日本語の文章を正しく理解し、表現するために重要であり、児童生徒の発達の段階や興味・関心、意欲等を考慮して適切に指導していくことが大切である。特に、コンピュータ等の情報機器を活用する場合には、ディスプレイ画面上の文章を音声化して理解するために漢字・漢語の理解が必要であるので、この点も踏まえた指導が必要である。また、児童生徒の学習状況によっては六点漢字、八点漢字など点字による漢字の表記について指導することも考えられる。(太字筆者)

学習指導要領という公的な文書の性格上、難解な書きぶりではあるし、川上泰一氏が漢点字という名称で考案・発表されたものを八点漢字という名称に変更している不満はあるが、漢点字の指導の必要性について初めて明確に触れた画期的な文章であると評価したい。

筆者としては、さらに踏み込んで漢点字の指導を積極的に促すような記述にしてほしかった

とは思うが、これでも、学習指導要領という文書の性格からすれば「よくぞ書いてくださった」というべきであろう。

とにかく、学習指導要領に明記された以上は、学校現場として漢点字の存在を無視できないし、その導入を真剣に検討しなければならないという条件が整ったのである。

鳥取盲学校に（そして、全国の学校現場に）、漢点字の授業実践を積み重ねて、先述の筆者の予言を堂々と実証してくれる後輩教師が輩出することを切望して止まない。

参考文献

- 川上泰一(1995) 漢点字入門(墨字版) 日本漢点字協会
 末田 統・加藤俊和・有本圭希・川上リツエ(1999) 川上漢点字(墨字版) 日本漢点字協会
 鳥取県立鳥取盲学校(2002) 平成13年度研究紀要 領域分野別研究会実践報告～点字班2 pp. 1～2
 鳥取県立鳥取盲学校(2003) 平成14年度研究紀要 領域分野別研究会実践報告～漢点字班 pp. 1～2
 鳥取県立鳥取盲学校(2004) 平成15年度研究紀要 領域分野別研究会実践報告～漢点字班 pp. 1～2
 鳥取県立鳥取盲学校(2006) 平成17年度教育実践 漢点字の初歩 pp. 48～49 漢点字学習の導入 pp. 95～98
 鳥取県立鳥取盲学校(2006) 平成17年度  p. 30
 ※  = 年輪

引用文献

- 特別支援学校学習指導要領解説(2009) 教育出版 pp. 226～227